

鮭 鱒 彙 報

第七年 第十二號

昭和十年九月五日

北海道鮭鱒保護協會

(膽振國歲村北海道鮭鱒化場內)

目次

論叢

米國プリストル灣の鮭禁漁と蕃殖問題……………藤田經信…(一)

資料

北海道の淡水魚……………岡田 雋…(二)
新潟縣の鮭増殖現況……………越田秀包…(五)

地方通信

石狩通信……………(三)
擇捉通信……………(三)
千歲通信……………(三)

彙報

昭和九年度鮭人工孵化事業成績……………(三)
昭和九年度鱒人工孵化事業成績……………(五)
鮎の産額……………(七)
河鱒種卵の配給……………(七)
第三回全道湖沼養殖研究会……………(八)
全道湖沼養殖研究会の本會加入……………(九)

會報

第七回總會記事……………(九)
會員消息……………(一〇)
會費領收報告……………(一〇)
寄贈圖書……………(一七)



支笏湖

(菊地覺助氏撮影)

新刊案内

北海道帝國大學附屬
水産専門部教授 理學博士 藤田經信序
北海道廳技師 半田芳男著

【訂正再版】

鮭鱒人工蕃殖論

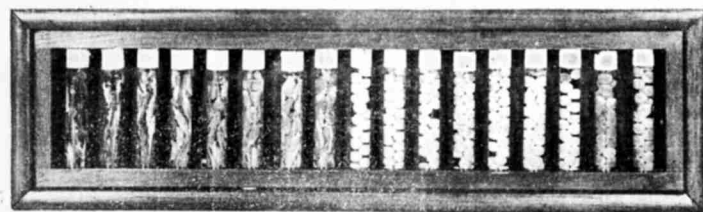
定價金四圓五拾錢

送料内地 三十四錢
臺灣、樺太 三十四錢
朝鮮、關東州 三十四錢
滿洲國、南洋 四十九錢

發行

札幌市北三條西五丁目
北海道廳水産課内

北海道鮭鱒孵化事業協會
振替小樽二一四八番

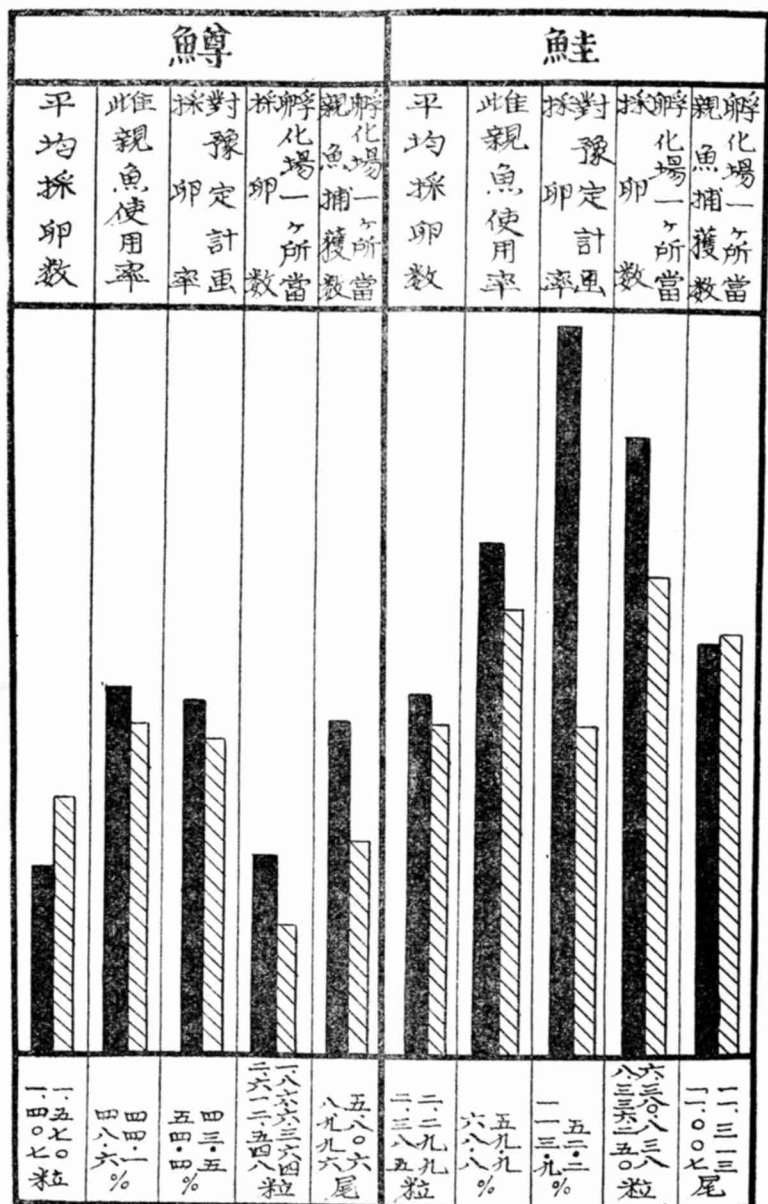




發售鮭標本實費配布

〔錢二十料送〕圓二金組一乙 〔要不料送〕圓五金組一甲
記前し製作を本標生發鮭るた料資好の上業産・術學・育教
もてしと品飾裝内室てしに美優裁体。す布配て以を費實
れあ込申急至す適好

北海道人道鮭鱒保護協會

振興千歲村北海道人道鮭鱒孵化場内



 稈管後成績
 稈管前成績

論叢

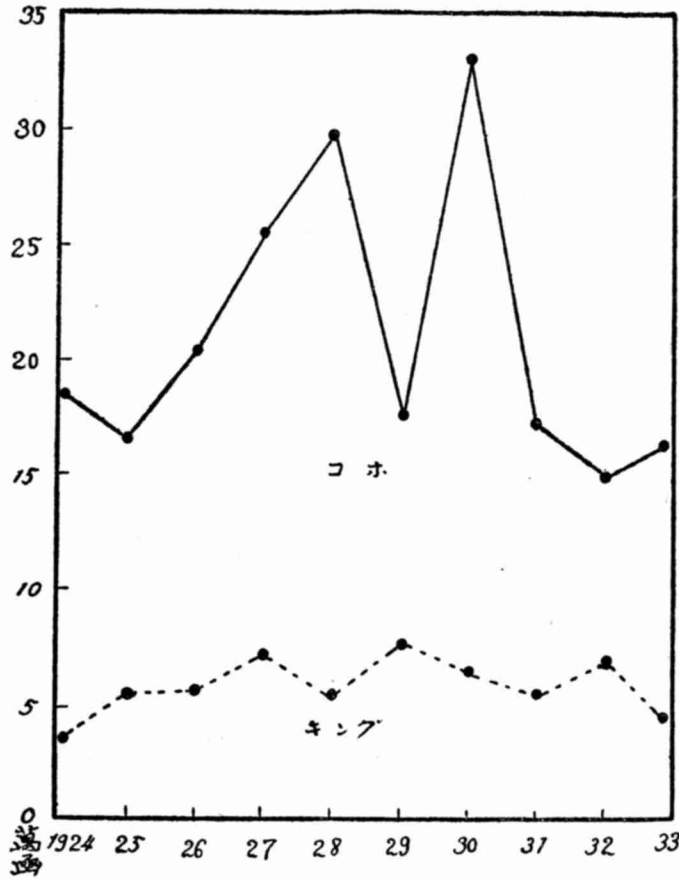
米國プリストル灣の鮭禁漁と蕃殖問題

藤田經信

昨年米國で水産界を震撼させた問題は、同國西部アラスカのプリストル灣に於ける紅鮭 (Oncorhynchus nerka) の禁漁事件であつた。この禁漁はたゞ本年(一九三五年)だけに限られたものだが、それが鮭の蕃殖に關係してゐるから我業界にも極めて興味深い問題である。紅鮭禁漁の噂は一、二年前からあつたが、なにしろアラスカといへば米國での水産寶庫であり、ことに現在鮭罐詰の王座を占める紅鮭はその特産であつて鮭類の總産額の三二%に相當するその内でプリストル灣の西部方面は九(%)を産して全アラスカ中の首位である。従つて同地方には罐詰業もすでに一八八五年に開始し、現に盛大に經營されて米國の重要産業の一である。米國では鮭の年産額を表示するのに尾數でも重量でもなく、罐詰として函數である。これは製品として多く販賣されるためである。

米國政府は常にアラスカに於ける鮭類の蕃殖には多大の努力を盡してゐる。先年ハーディング大統領の時代に鮭に關する權威者ギルバート博士は極力アラスカ地方の鮭類の保護必要を勸説した。しかしそれには罐詰業者が一齊に反對したため、つひに大統領のアラスカに於ける實地視察となつた。その結果ギルバート博士の意見が參酌され同地のやゝ廣潤な水面が禁漁區となり、同時にその數ヶ所に人工孵化場が新設された。その後年を経るに従つて禁漁の效果は顯はれて、業者も鮭類の保護に對する政府の英斷に敬服するやうになつた。最近には孵化場も好成績を挙げたので國立以外のものは存続の必要がなくなり多くは閉鎖された。米國とカナダ國との境界にフレイザー川があり、紅鮭も産するので著名である。この鮭の此處で産卵し得る面積は百五十萬エーカーで、その水質は清淨であり、食餌も豊

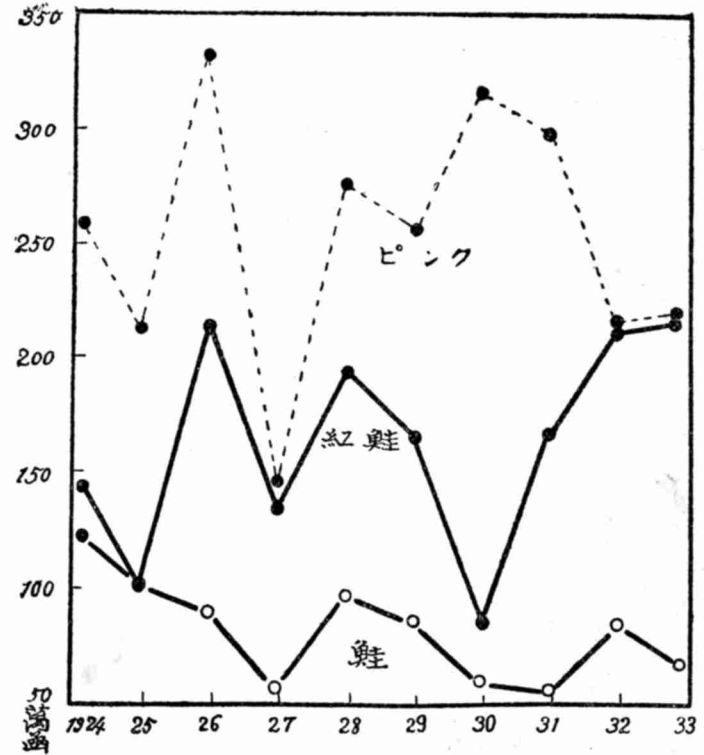
第二圖 前 (二)



富である。同川の紅鮭は年々遞減する事實はないが將來に備へるため一九三〇年五月米國はカナダ國と協商し一定の漁區と期間とを制限し、かつ漁具の種類をも限定して紅鮭の捕採を許可することにした。かやうな事實も遠く三、四十年前に稽へると感慨無量である。當時アラスカは勿論だが、フレザー川でさへ紅鮭の棲息は實に無盡藏と臆斷されてゐた。それが半世紀も経過しない今日、すでに保護の必要を痛感したのは、魚の蕃殖と漁獲との權衡が甚しく紊れたためである。

米國政府がなげ遠に本年プリストル灣の禁漁を敢行したかといふに、それは一九三〇年の凶漁と因果關係にあつてその後難を深慮したためである。この三〇年度魚は二五年度の凶漁時に放流された稚魚の回歸であることが明瞭ゆゑ、本年度魚は三〇年度魚の回歸に相違ない。それゆゑもしこれを平年のやうに漁獲するに任かすとこの同一系

第三圖 アラスカ地方に於ける鮭類 累年漁獲高 (一)

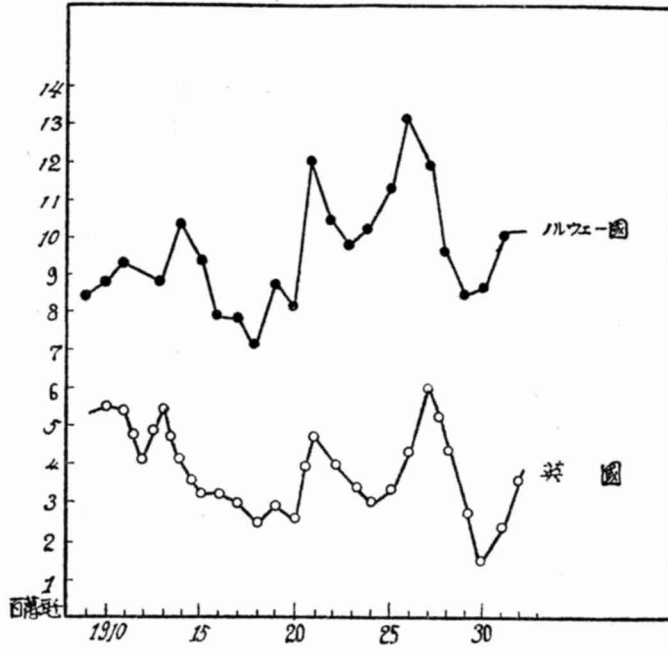


統魚は五年目の回歸毎に必ず遞減することは疑を容れないのである。

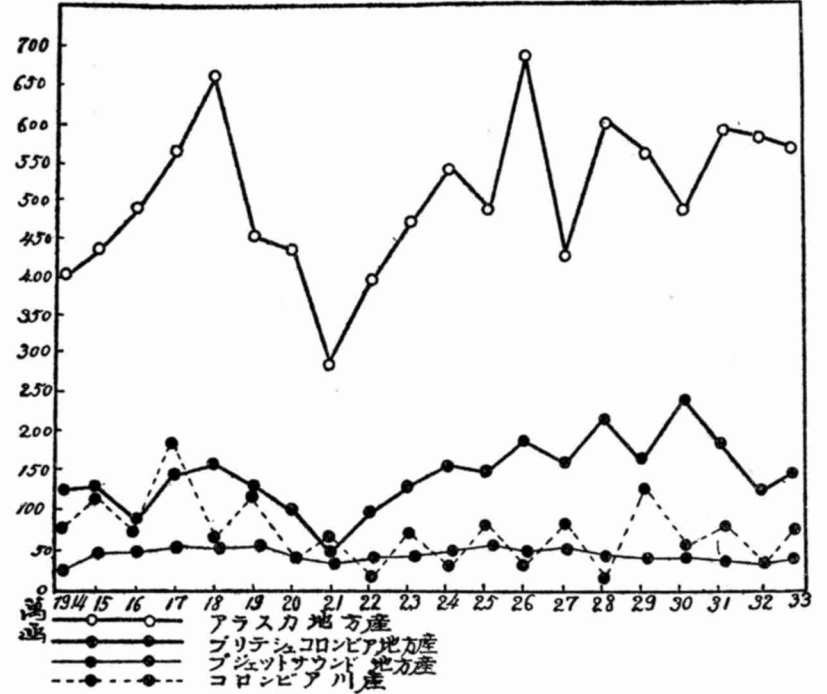
同じアラスカ地方で捕採されるピンクとコホとはその豊凶の狀況が全く紅鮭とは反對してゐて三〇年度にも豊漁であつた。しかしこれらの經濟的價値は到底紅鮭に及ばないから、米國政府は専ら紅鮭保護に熱中しこれが重要漁場のプリストル灣に於ける凶漁年度の絶對禁漁を試みて漁獲遞減の大勢を阻止せんとした。

プリストル灣附近には多數の罐詰工場があり、直接、間接これに衣食する業者も少なくない。政府のやゝ突然實施したこの禁漁政策に對して、業者の不滿であつた事は勿論だが果してどういふ態度を示したか。この禁漁問題は往年の

第四圖 ノルウェー國及英國鮭果年漁獲高



第三圖 米國及カナダ國鮭類果年漁獲高
比較表



アラスカのやうに長期に亘る禁止でないからそこに多少の自慰もあるが、これが我國での行政處分であつたなら業者も相當に沸騰したらうと思はれる。米國の水産雜誌を通覽したのに、この處置については甚しい苦情はなかつた。それに水産局のベル水産委員は一九三四年の紅鮭は豊漁であつて罐詰の殘品もまだ多量であるし、一年間の禁漁でその價格は自然騰貴する見込があるから業者は困憊することもないと思ふ。またその従業者も製品が多量であつたため、労働時間の超過、それに伴ふ勞銀の不時の増収もあつたから、少しばかり臨時の勞役でもあれば、僅か一年の生計を障へることは困難でもあるまいと樂觀してゐる。

鮭類の漁獲に年々豊凶のあることは上圖で見ると通りであるが紅鮭に限つて一九三〇年の凶漁がことに顯著なのは如何なる理由であるか、これはさらに深い研究を要する。

こゝに注意すべきはアラスカの鮭類の漁獲總高は他の地方に比すると常に卓越してゐるが年々亂高下がある。然し他の地方ではこれ

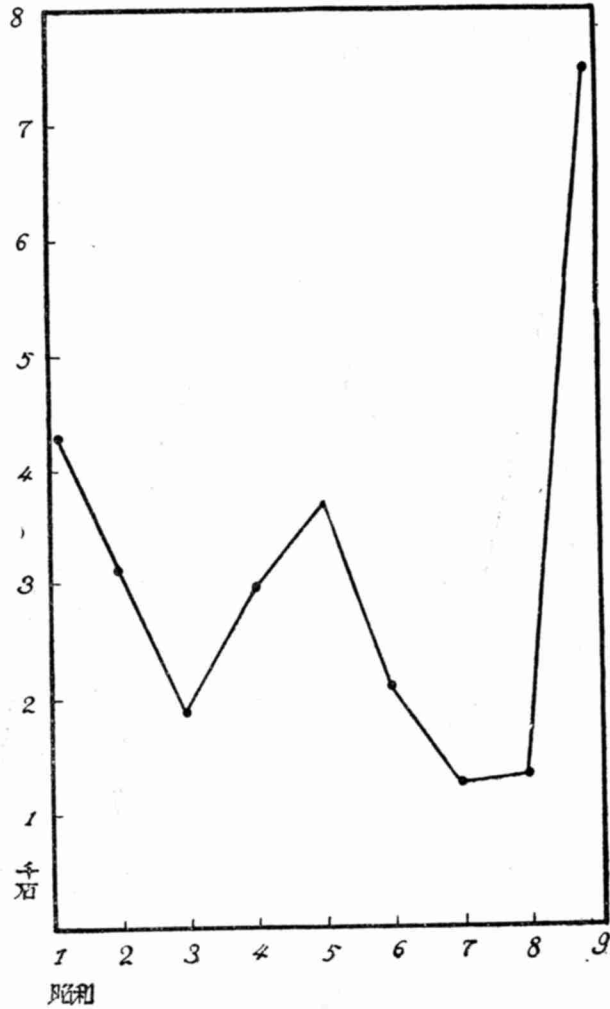
と異なる情勢を示してゐる。例へばコロンビア川の産額は年々殆んど同様であり、ブジェット、サウンド及びブリテンシュ、コロンビアでは漁獲豊凶の出現する週期は近年殆んど一定し、其産額も或範圍内に限定されてゐる。

同じ Onchorhynchus 屬の鮭でも種類によつて漁獲豊凶の出現する年度に差異あることは明瞭となつた。かやうな事實を他の大西洋に産する鮭屬 Salmo について考査するも甚だ必要と感じ一九三〇年の同魚の漁獲高を調査した。しかしそのよく判明したものは英國及びノルウェー國のみであつた。

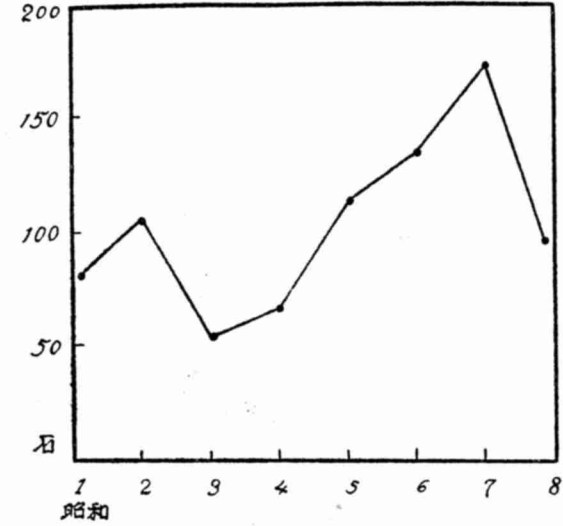
この兩國とも一九三〇年は寔に凶漁の厄年であつたが、ノルウェー國では一九二五年が凶年でもなかつたためか決して前途を悲觀してゐない。かく大西洋産鮭と米國西部アラスカ産紅鮭とがその運命を均うしてゐるのは偶然であるか或は特に理由が存在してゐるのかは現在全く不明である。

我國の鮭にもその漁獲に年々豊凶の嘆がある。これを歐米の事相に照らして検討するにその運勢は必ずしも同一ではない。予の調査

第六圖 北海道石狩支廳管内鮭魚年獲高
(日本海方面)



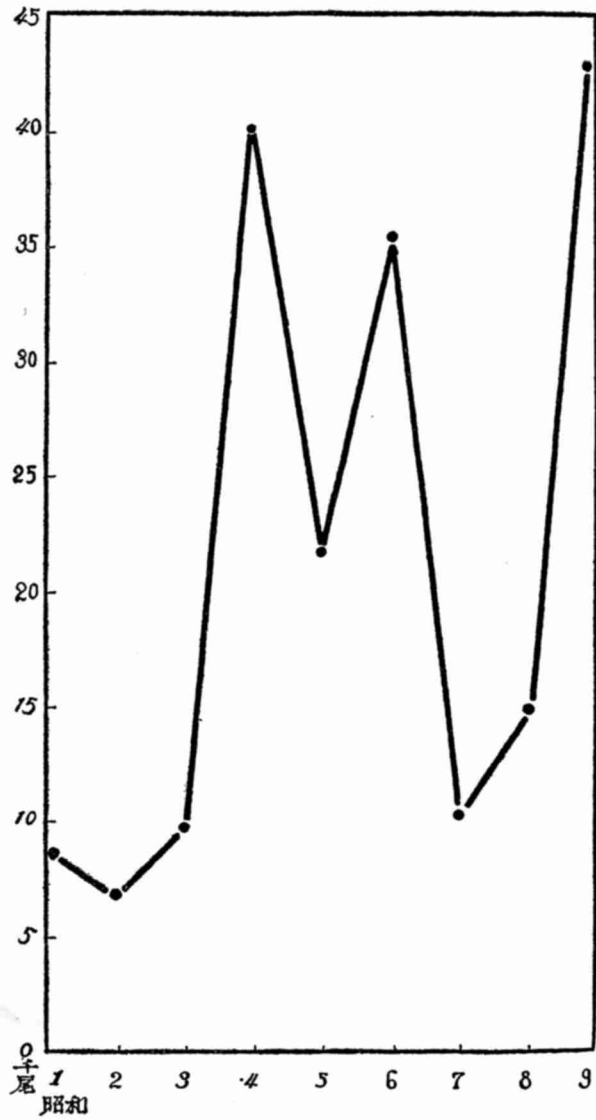
第五圖 樺太多蘭泊川漁場鮭魚年獲高
(日本海方面)



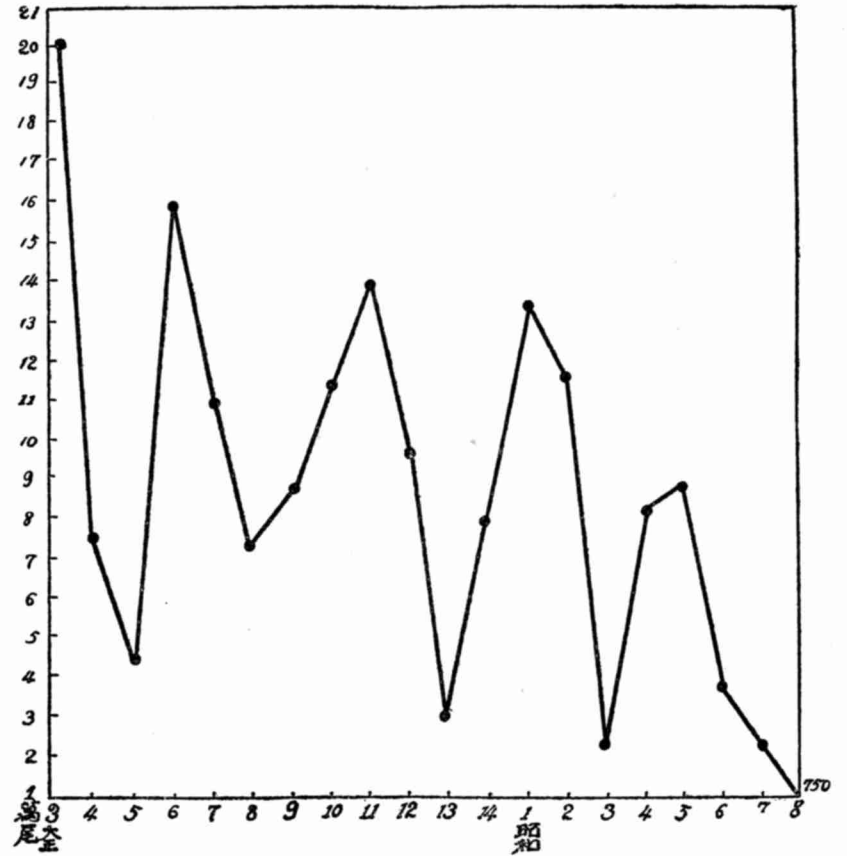
したものは太平洋方面では岩手縣津輕石川及び福島縣新田川であり、日本海方面では樺太多蘭泊川、北海道石狩支廳管内の諸川、新潟縣の三面川であつたがいづれも昭和五年（一九三〇年）の鮭魚獲高は最近十ヶ年の平均額以上で決して凶漁ではなかつた。これに反して我國の凶漁は昭和三年（一九二八年）及びこれにつき同年魚の回歸する同七年（一九三二年）であつた。この現象は津輕石川、新田川、北海道石狩支廳管内の諸川に著しい。この年次の漁況は歐洲では豊漁であつたが、米國では區々であつて、世界的に一致してゐない。また我豊漁の事實を見るに近年では昭和元年（一九二六年）に著しく同魚の系統が同様の運命を擔ふがその實現が太平洋方面と日本海方面とは一年の遅速がある、即ち太平洋方面では昭和六年（一九三一年）に豊漁があり日本海方面にはその前年にこれが現はれた。かくて鮭の回歸する期日に差異のあるのは複雑な環境によるためでもあるが、要するに種族の相違に基くものと思はれる。

米國がプリストル灣で紅鮭の禁漁を斷行し

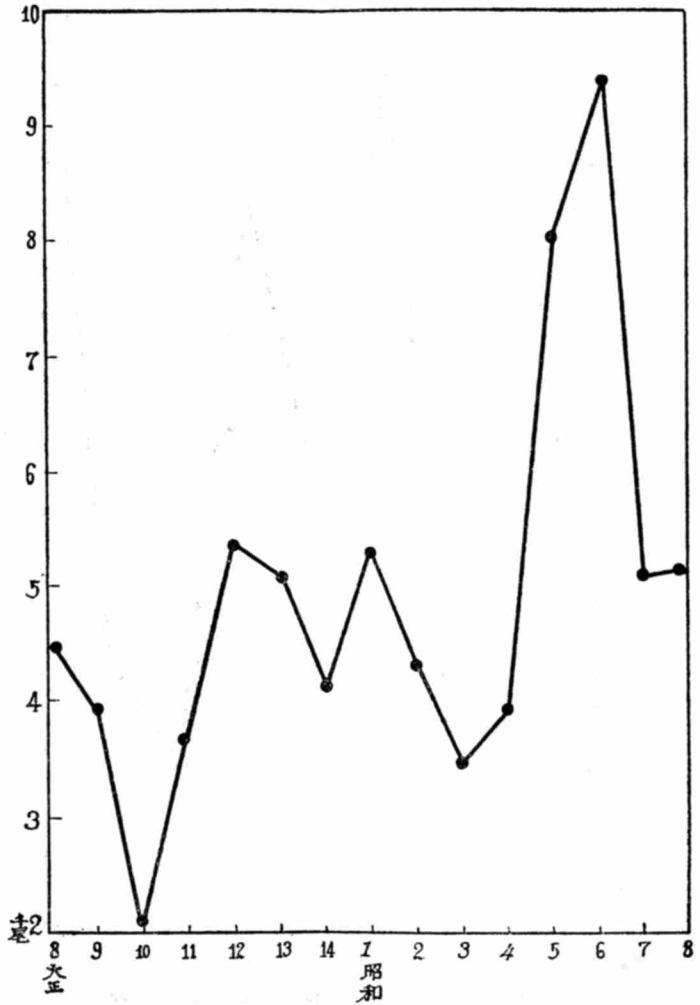
第八圖 岩手縣津輕石川鮭累年漁獲高
(太平洋方面)



第九圖 三面川鮭累年漁獲高
(日本海方面)



第九圖 福島縣親田川鮭累年漁獲高 (太平洋方面)



たのは、これが蕃殖上最も明快な處置であつて、その結果がいかに一九四〇年に顯揚されるかは最も興味あり、また示唆に富む問題である。

我國で鮭の豊凶漁況と漁獲遞減のやゝ明瞭な事は新潟縣の三面川である。同川の明治二十二年(鮭漁衰態期)より以後の統計を見ると明に四年毎に豊凶いづれも相亜いでゐる。その結果豊凶漁いづれも交互して二期出現する。その状況は左の如し

第七年七十二號

漁況	系統	年	次
豊漁	明治20年魚	21	23
	大正4	8	12
	昭和2		
凶漁	21年魚	25	29
	33	37	41
	昭和3	7	
豊漁	22年魚	26	30
	34	38	42
	大正2		
凶漁	23年魚	6	10
	14	18	22
	昭和4	8	
	27	31	35
	39	43	大正3
	7	11	昭和1
		5	9

前表中年代のゴヂツクは系統の出現的中したものである。従つて明治二十年及び二十一年の兩系統魚ではやゝ正確に回歸したものが多く、次年度のものはそれほどでもない。しかし概して豊凶ともにその傾向を示してゐる。た

昭和八、九年はいづれも豫想に反した。こゝに最も省慮すべきことは、三面川では豊凶によるいかなる年度でもその漁況が逐年遞減してゐることである。これに對しては豫め深甚の方策を樹て、いよゝ衰亡せんとする漁業の挽回を圖らねばならない。これは多年官民の唱道しそれがため人工孵化による蕃殖法を講じてゐる次第である。なほそれでも將來十分救済することが出来ないといふ状況であるなら、せめて凶漁だけでも阻止する方法を謀ることが必要である。米國のやうに禁漁制度を布くことは至難であらうが漁期を制限して多數の鮭を産卵のために溯上させ他日に備ふるも一策である。凶漁年の到來は豫斷が出来るからこれを業者に警告すれば、たとひ漁期が制限されても、それで遽に失業することもなからう。永年鮭を漁獲する河川ではその結果が三面川のやうに顯著でなくとも同様の趨勢を現はしてゐることと思ふから、またこれが對策を講ずることが緊要である。寔に米國プリストル灣の禁漁問題が鮭の蕃殖に對して暗示するところが少くないと自警する次第である。

北海道の淡水魚

北海道鮭鱒孵化場 岡田 雋

報 彙 鱒 鮭

今回北海道鮭鱒孵化場が、實質上、淡水々族試験場として面目を一新したことは既に周知のことであるが、この秋に際して、鮭鱒孵化場の管轄區域たる我が北海道の淡水魚について、一應の常識を具へて置くことは必要な事であらうと思ふ。以つて小篇を草し参考資料とする所以である。

扱、一概に淡水魚と云つても、純粹の淡水魚の種類は甚だ僅かなもので、日本全國の種類を蒐めても五十種には充たないだらうと云はれてゐる。殊に北海道に産する淡水魚と極限すると、愈々少くなつてせいゝ十數種位のもので二十種とは居ない様に思ふ。

海道では、此の種の魚に、産業上重要な種類の多くあることは今更贅言を要しない所である。

それ故、茲では斯様な、生涯に淡鹹兩水に生活する様な種類をも含め、平生余り關心を持たない純淡水魚の種類を擧げて、参考に供したいと思ふ。

先づ吾人に最も關心の深い鮭科 (Salmonidae) から擧げてゆくが、鮭科についての知識は充分に知られてゐることであるから、簡単に名稱を列擧するに止めて置く。

- 一、鮭 *Oncorhynchus keta* (Walbaum)
- 二、鱒及びヤマメ *Oncorhynchus masou* (Brevoorts)
- 三、樺太鱒 *Oncorhynchus gorbuscha* (Walbaum)
- 四、紅鱒及び姫鱒 *Oncorhynchus nerka* (Walbaum)
- 五、イトウ *Hucho perryi* (Brevoort)
- 六、イワナ及びアママス *Salvelinus malma* (Walbaum)

七、アユ *Plecoglossus altivelis* Jordan & Schlegel
次にワカサギ科 (Argentinidae) に屬するものを擧げると、

八、チカ *Hypomesus olidus* (Pallas)
九、キヌウリウオ *Osmertus dentex* (Steindachner)

十、シシヤモ *Osmertus lanceolatus* Hikita 何れも北日本の魚であるが、チカは各地に移殖されて、大分南方の中國地方にまで分布してゐる。何れも産卵の爲に溯河する。

次に白魚 (Salangidae) 科に屬するものには唯一種シラウオがある。

十一、シラウオ *Salanx microdon* (Bleeker) 春季、泥土質の河川を産卵の爲に溯河する。内地にも産し、樺太の南部にも居る。

鯉科 (Cyprinidae) のものは四種居る。

十二、コナ *Cyprinus carpio himmé* 本邦在來の種類は世界に廣く分布する種類と同一種であるが、鏡鯉と云つて鱗が体に粗に散在するものや、革鯉と云つて、全く鱗を缺いてゐる變種が獨逸から移殖されてゐる。

十三、フナ *Carassius auratus* (L.) 内地は勿論樺太にも産する。鮒は非常に變異に富むもので、人に依つて随分多くの種類が認められてゐる。樺太の國境近くに

ある多來加灣に居るものは、著しく内地邊のものと同形態が異つてゐて、學術上珍稀なものとされてゐる。千島には前記の鯉も本種も居ない。上記の學名は元來金魚に與へられた名稱で外國の野生の鮒には *Carassius carassius* と學名がついてゐる。田中茂穂博士は邦産の鮒は之と同一種と見て、*Carassius carassius* と云ふ學名を邦産の鮒に與へて居る。

十四、ウグイ *Leuciscus hakonensis* Günther 常に河に棲んで居るものと、平生海に居て、産卵期に河へ上つて來るものと二型ある。産卵期には腹部が赤くなつて追星が明瞭に現はれる。此の時期のものに「赤はら」と云ふ名がついてゐる。樺太、千島、内地にも居る。

十五、アブラハヤ *Leuciscus jonyi* I. & S. ウグイによく似て居るが少し小さく、皮膚は漬れた色をしてゐる千歳邊ではヤチウグイと云つてゐる様だ。内地、樺太には分布してゐるが、千島にも居るかどうかわからない。余り大きな河には居ないもので、水田の灌漑溝等をさがすと見つかる。

次にドジョオ科 (Cobitidae) に屬するものに三種ある。

十六、ドジョオ *Misgurnus anguillicaudatus* (Cantor) 普通内地ドジョオと稱して居るものである。田中博士は外國に産する *M. fossilis* と同一種と見做して、最

近ではこの學名を用ひて居る。雄は胸鰭が大きくて幅が廣く、又背鰭の附け根の所が隆起してゐるから、雌は容易に判別出来る。内地以外、樺太、千島の分布状態は今の所解らない之は腸呼吸をするので有名である。

十七、フクドジョオ *Oreias oreas* (Jordan & Fowler) 之は北海道、樺太に産し、内地には居ない。千島には多分居るであらう。前者が濃い泥土質の小川に居るのに對し、之は大きな清冽な河に棲息してゐる。之も前種同様胸鰭で雌雄が判る。

十八、エゾホトケドジョオ *Iefūa nikonis* (Jordan & Fowler) 水田の灌漑溝の様な所に居て、大きな河には居ない。雌は地味な色合であるが、雄は黄色の地に黒い縦線が横腹を一本通つてゐて綺麗である。北海道だけに産する千島にはどうであらうか。北海道のドジョオ類はこの三種だけであると思はれるが、此の三種は簡単に口邊の鬚の數で鑑定出来る。つまり内地ドジョオは十本、フクドジョオは六本、エゾホトケドジョオは八本持つてゐる。

棘魚科 (*Gasterosteidae*) のものは二種居る。
十九、イトヨ *Gasterosteus aculeatus* (L.) 次に述べるトミヨと共に普通トゲウオ又はトンギヨと云はれてゐる。

りでは之を食ふそうだが、仲々うまいものだ云ふ。頬のあたりに朱色の線條があつて仲々綺麗な小魚である。
二十、チハハ *Tridentiger obscurus* (Temminck & Schlegel) トランゼとも云ふ。このハゼが五種の中で一番大きい。第一背鰭の鰭條が著しく延びたものがあるが、之は多分雄であらう。内灣の如き鹹水にも居るが、何れで産卵するか不明である。
二一、ウキヨリ *Chasogobius macrognathos* (Bleeker) 第一背鰭の後端上部に顯著な黒点がある。チ、ブとウキヨリは北千島を除いて、樺太、南千島、内地と廣く分布してゐる。

次にカジカ科 (*Cottidae*) では次に述べるカジカの外にカマキリ *Cottus kazika* と云ふのが居るかと思ふが、まだ採集してゐない。
二二、カジカ *Cottus pollux* Günther 樺太、千島にも居るであらう。内地には無論居る。
鰻科 (*Anguillidae*) に屬するもの

二六、ウナギ *Anguilla japonica* Temminck & Schlegel 七、八年で成熟し、産卵期が近づくと冬期、河を下つて海へ入る。その産卵場所は、歐洲や米國東岸に産するものは、キューバの北方に當る深海だと云はれてゐるが、これは背部に鋭くて長い三本の棘をもつてゐる方である。之には二型あつて *G.a. microcephalus* は本州だけにゐる陸封型、今一つの型 *G.a. aculeatus* にも陸封型と溯河型とあるが北海道には兩型とも見られる。春季産卵の爲溯河し、大抵小川とか静かな沼等で産卵する雄が精巧な産卵巢を營むことは周知のことであらう。産卵後雌は死んでしまふ。雄も稚魚が獨立出来る様になると死んでしまふらしい。雌雄の區別は背棘の根本から先端まで鋸齒のあるのが雄で、根本だけにあるのが雌。内地、樺太、千島にも居る。

二〇、トミヨ *Pygosteus sinensis* (Günther) 從來數種に分けられてゐるが、田中博士は之等を一種と見てゐる。小さな川に居るもので、背棘は短かくて小さいのが七本乃至十三本ある。海に下らない。之も前者同様營巢する。本州、樺太、千島にも居る。
次にハゼ科 (*Gobiidae*) では目下の所五種類採集してゐるが、その中一種は學名未詳につき省略する。凡て二寸乃至三寸位の可愛らしい小魚である。ハゼ類の特徴として腹鰭が吸盤となつてゐる。

二一、ビリンチ *Chloea castanea* (O'shaughnessy) 札幌神社境内の溪流で採集したが、他にも居る様だ。
二二、ヨシノボリ *Rhinogobius similis* Gill 四國あた

るが、我が國に産するものゝ産卵場所はまだ解つてゐない。稚魚は一寸五分位のものが春季溯河して川で成長するのだが、その形態が親とまるで異つてゐて、柳葉狀の無色透明なものである。之をレプトセファルス (*Leptocephalus*) 又はシラスウナギと云ふ。稀に樺太でもとれる。
ヒラメ科 (*Pleuronectidae*) に屬するものでは
二七、カワガレイ *Platichthys stellatus* (Pallas) マガレイとも云ふ。河口とか、河口に近い沼などに上つて来る。東北地方、樺太、千島にも居る。左側の右鰓と云つて、体の左側に眼のあるのをヒラメ、右側にあるのをカレイと一般に思はれてゐるが必ずしもそうではない。本種は左側にある。

大分縁の遠いものに鱒魚科 (*Acipenseridae*) のチヨオザメがある。
二八、チヨオザメ *Acipenser mikadoi* Higendorf 之は北海道の石狩川と天鹽川に産する珍稀な種類で、六尺に達するものもある。産卵の爲溯河する。仲々美味なものだそうだが、まだ廣くその味を知られてゐない。

圓口類の八目鰻科 (*Petromyzonidae*) には二種産する
二九、カワヤツメ *Entosphenus japonicus* (Mortens)

体長一尺乃至一尺五寸ある大形の方である。春季産卵の爲主に日本海沿岸の河川を溯上するが、太平洋岸の河川にも全然居ない譯ではない。稚魚は河底の泥土に埋れて數年の幼生時代を送る。この幼生は親と大分形態に差があつて、最初之を全く別種のものと思つて *Ammonoetes* と云ふ屬名を與へた。今日ではこの屬名はない譯であるが、便宜上ヤツメの幼生時代をアンモシーテスと呼んで居る。幼生には五、六寸にもなるのが居て、之は體て冬期に一氣に變體を完成して成体となる。

二〇、スナヤツメ *Lampetra planeri* (Bloch) 終生小川に居て海へ下らぬ、七、八寸の小形の種類である。

新潟縣の鮭増殖現況

本縣の鮭鱒は古くから饒産し、縣民も一般に嗜食する。北海道樺太に比ぶれば其生産量僅少には違ひないが、内地府縣では太平洋岸の岩手縣、日本海方面で本縣が最も多量

従來背鰭と尾鰭の離れてゐるものをカワヤツメ、連絡してゐるものをスナヤツメとしてゐるが、最近の研究に依ると、平生離れてゐる背鰭と尾鰭は生殖時期になると接着して來るものと云ふ。田中博士はスナヤツメはカワヤツメの一種であると考へて居られる様だがこの研究は田中博士の説を有力ならしめてゐる。雌雄の區別は何れも、肛門の後に所謂肛鰭のあるのが雌で之のないのが雄である。面白いことは、カワヤツメもスナヤツメも共に、鮭鱒と同様に産卵に際して、砂礫質の河底に所謂堀を掘ることで、五、六月頃には容易に之を實見することが出来る。

一九三五・五・三〇一

越 田 秀 包

の漁獲を擧げてゐる。

古來越後の水産物といへば何を指しても指を鮭に屬したもので、魚(いを又はいよ)といへば鮭を意味し、漁期勞

頭に漁獲した初鮭は一尾の價十數圓乃至數十圓を唱へることさへあり、藩政時代にあつては初鮭は年中行事の一とし藩主を始め士分に限り其の一片宛を分配して祝する慣例があつたに徴しても、如何に鮭を貴んだか窺知される。本縣は元小藩分立し信濃川阿賀野川の如き大河は一川數藩の領有に涉り、鮭鱒蕃殖保護も一定の制度は見られなかつたが各藩主はよく留意措置され、その遺風は今尙漁政施設の一として重きをなしてゐる。殊に三面川に於ける種川制度は約二百數十年前寶曆年間に村上藩士青砥武平次が、鮭の習性を研め蕃殖に適當な保護河川の制度を治水事業と並行的に設けたもので、本縣漁政上永久の誇りであり、學界に於ても我が國の名譽とする。

本縣鮭人工孵化事業は明治十一年十二月農務省勸農局金田歸逸氏が岩船郡三面川にて創められ、爾來明治二十四年迄東京府外數府縣に分讓送付し、同二十五年から同三十一年の間は新潟縣淡水漁業聯合會で經營に當り、翌三十二年以降は縣水産試驗場で之を繼承し、主要河川内五ヶ所の孵化場で年々一千四五万粒の孵化放流をなし鮭魚の維持増殖を圖つてゐる。別に三面川では舊藩士族の組織する村上鮭産育養所も協力して孵化放流に努めてゐる。

鮭漁獲高に就いては古いものは文献の徵すべきもの少く三面川鮭漁獲高は明治六年以降稍正確に記録され、今にな

つては嘘の様な話であるが同十七年の漁獲數は七十三萬七千三百七十八尾と記され、實際はそれ以上計算の違がない程の大漁で、近郷近在の鹽と漬桶が沸底し、河原の砂地に大穴を掘つて埋めたり、馬につけた六七駄の鮭が行衛不明になり、八厘通用の天保錢一枚で大鮭が購はれ一寸愛嬌でも振りまけばもう一尾添へて呉れたと傳へられてゐる。

縣統計では明治三十二年よりのものが明かで、明治四十四五年には何れも二十七万尾台で最高を示してゐる。其後漁獲高は漸減の傾向を辿りつゝあつたとは謂へ、明治初年北海道から移入された建網漁業が、日露戦争後急激に勃興して以來漁法は精巧を加へ規模は擴大され、漁業件數亦増加して、河川と海面の漁獲比率に著しい變調を生じ、河川漁業は甚しく打撃を蒙り、痛く漁獲と蕃殖の平衡が亂されて來た。明治四十一年以降の河川と海面の漁獲比率を見るに四十一年には河川八二・五%なりしもの遂次其率を低下し、沿海漁獲は半數を越し、昭和四年の如き河川漁獲率僅か三〇・八%に低下した。

年次	自明治四十三年至大正四年	自大正五年至大正十年	自大正十一年至昭和四年	自昭和五年至全昭八年
年平均漁獲高	一三、〇九	一九、三五四	一〇、〇六四	一〇、二九四
河川漁獲高	九、九〇	二、三五八	四七、〇八四	五、二九三
沿海漁獲高	三、一九	九、九八六	五、二五五	四、九八八



本縣に於ける放流稚魚の大部分は四年目に回歸し、残余の一部は三年目又は五年目に回歸するものゝ如く、四年目に回歸するもの六〇乃至七〇%にして、三年目及五年目のもの四〇乃至三〇%の如く、年によつて兩者に差あるも大約各半數と見做され、近年幾分五年魚の割合を増せる傾向がある。回歸は環境殊に海況に左右される事が甚だしい。然し漁獲高と縣水産試驗場の増殖施設施行以後の稚魚放流數を回歸年數に基き之れを對比するに

年代 稚魚放流尾數 縣統計ニ依ル漁獲高
 既往 三十五年平均 四、〇元、三七尾 昭利四年平均 三三、七〇貫

最近漁獲量の大部分は人工孵化放流魚の回歸によるものと見做される。

大正十五年以來各年平均放流尾數は六百八十万尾なるが故に、その漁獲高は前記標識魚の回歸漁獲率から推測歸納すると二十七万尾乃至三十七万尾の漁獲量が豫想される。而して最近の縣統計による鮭の漁獲高は十四万尾前後（漁獲魚の平均体重は雌魚四、〇四五瓦 雄魚三、七六四瓦 平均一尾當り三、九〇四瓦なれば一尾平均体重を一貫匁と見做す）であるが、實際の漁獲高は恐らく統計高の二倍以上に上るものと認められる（海面二十ヶ所の實査は統計の一、三、河川の沿岸七ヶ町村の實査は統計の二倍一、其他統計

採卵關係漁場漁獲尾數調

年次	河川漁獲高			計	沿海漁獲高			計	漁獲		
	九月	十月	十一月		九月	十月	十一月		河川	沿海	合計
大正15	2,700	22,918	22,874	45,682	170	73,114	828	73,114	45,682	119,096	61.39
昭和	2,600	15,287	23,864	39,151	267	59,848	800	59,848	90,010	66.49	
2	1,400	17,237	10,889	28,526	150	36,992	510	36,992	55,870	66.21	
3	1,697	13,801	7,590	23,088	314	30,678	4,522	30,678	61,819	49.62	
4	476	1,058	4,306	5,840	937	20,161	600	20,161	45,028	44.77	
5	508	829	3,915	5,252	249	11,073	760	11,073	37,567	22.78	
6	126	791	3,645	4,562	145	10,652	371	10,652	25,080	42.47	
7											

に表はれぬものを合算せば）今假りに二倍と假定せば二十八万尾の漁獲量に相當し、二倍五と假定せば三十五万尾の漁獲量と推定される。回歸率からする豫想數と推定漁獲量とは畧一致する。

河川の利用は將來年と共に愈々盛んなるべく到底現在の放流計畫ではその目的を達成する事困難なれば、獨り漁業者のみならず廣く縣民の關心を喚起し協力して孵化放流を擴張し、一面漁政上にも更正の策を建て、種族減少の因をなすものゝ去除を期してゐる。

最近の狀況は次表の如くにして、採卵數に比し放流數の多きは北海道より購入せるものあるによる。

8	73	791	3,307	2,145	124	6,440	253	2,283	7,075	917	10,528	6,440	10,528	16,978	37.99
9	13	1,120	7,865	8,076	26	17,100	155	3,030	14,955	5,375	23,515	17,100	23,515	40,615	42.12
平均	1,066	8,159	9,806	10,221	265	29,562	978	6,120	14,270	4,974	26,341	29,562	26,341	55,903	52.88

採卵期間中に於ける關係漁場漁獲調

年次	漁獲尾数		使用親魚		採卵数	漁獲数		使雌漁獲%		孕卵数(尾)	放流数(尾)					
	成雌	熟雌	未熟雌	合計		雌	雄	雌	雄		使雌	孕卵	放流			
大正15	4,082	1,407	5,998	8,839	20,327	4,054	1,424	8,260,000	10,080	10,246	49.59	39.71	24.6	2,063	40.6	7,436,436
昭和1	5,371	5,234	2,788	2,837	16,232	4,397	1,758	9,346,700	8,159	8,071	50.26	43.98	17.4	2,883	57.6	8,078,271
2	1,199	2,586	1,659	1,850	7,588	799	457	1,763,000	2,858	4,436	37.66	28.31	43.0	2,306	23.2	1,636,148
3	5,474	4,651	2,927	2,287	15,339	5,131	1,807	12,187,700	8,401	6,938	55.42	61.01	12.6	2,378	79.5	13,527,091
4	6,518	6,423	3,987	4,078	22,503	5,612	2,462	14,371,900	12,002	10,501	48.88	46.76	15.6	2,560	63.9	13,235,146
5	3,778	3,971	5,484	4,012	15,748	3,363	1,682	8,265,600	7,765	7,983	49.31	43.31	19.0	2,458	52.1	7,466,212
6	4,161	4,710	2,340	2,378	13,589	3,305	1,889	8,630,550	6,501	7,088	47.84	50.83	15.7	2,612	63.6	8,566,388
7	1,493	2,969	1,394	1,133	6,589	1,156	752	2,919,850	2,887	4,102	41.81	40.04	22.5	2,525	44.3	4,894,480
8	8,078	8,060	5,461	4,226	25,825	5,874	2,976	14,137,200	13,539	12,286	52.43	43.39	18.3	2,407	54.6	未放流
9	4,462	4,446	3,449	3,514	15,871	3,743	1,690	8,876,000	7,911	7,960	49.88	43.40	18.7	2,429	55.8	8,116,260

雄 雌 雄 雌

河川漁獲尾数

年次	漁獲尾数		使用親魚		採卵数	漁獲数		使雌漁獲%		孕卵数(尾)	放流数(尾)					
	成雌	熟雌	未熟雌	合計		雌	雄	使雌	孕卵		放流					
大正15	5,334	4,883	396	313	10,926	5,612	2,495	14,947,000	5,730	5,196	52.44	97.98	7.5	2,663	137.6	13,235,146
昭和1	3,879	3,394	1,365	2,043	10,675	4,123	1,512	9,691,400	5,244	5,881	52.44	97.98	7.5	2,663	137.6	8,750,616

年次	漁獲尾数		使用親魚		採卵数	漁獲数		使雌漁獲%		孕卵数(尾)	放流数(尾)					
	成雌	熟雌	未熟雌	合計		雌	雄	使雌	孕卵		放流					
6	3,261	3,365	413	504	7,543	3,348	1,544	8,011,600	3,674	3,869	48.71	91.07	9.4	2,393	106.2	7,466,212
7	3,827	3,838	559	768	8,871	3,999	1,576	9,690,100	4,386	4,606	47.38	77.05	10.4	2,598	95.5	8,566,285
8	3,592	3,795	403	418	8,567	3,226	1,799	8,386,300	4,160	4,622	47.38	77.05	10.4	2,598	95.5	8,884,177
9	1,441	2,339	281	298	4,359	1,233	746	3,114,100	1,722	2,637	39.50	63.64	15.8	2,540	71.4	4,894,480
平均	3,071	3,729	422	448	8,272	3,918	1,675	9,575,800	4,093	4,177	41.77	77.05	10.4	2,540	95.5	9,537,825
9	6,766	6,740	1,026	976	15,218	4,262	2,242	10,065,700	7,492	7,716	49.23	57.02	15.2	2,361	60.6	未放流
平均	4,112	4,306	504	502	9,365	3,088	1,575	7,593,800	4,616	4,838	49.11	81.52	10.2	2,438	96.1	8,116,260

備考 年次欄ノ上記数ニ其年ノ取扱数ニミテ下記数ハ全年ニ於ケル既往毎五ヶ年平均値ナリ
 年次欄ノ記入数ノ平均値ニシテ放流数平均ノミハ大正十五年年度ヨリ八年度ニ至ル平均値ヲ記セリ
 放流ハ全年秋期採卵ニ係リ次年度初メニ放流スルモノナルカ便宜同一年度トセリ

沿海漁獲尾数

年次	漁獲尾数		使用親魚		採卵数	魚獲数		使雌漁獲%		孕卵数(尾)	放流数(尾)				
	成雌	熟雌	未熟雌	合計		雌	雄	使雌	孕卵		放流				
昭和1	1,184	1,540	5,089	3,795	11,578	1,162	532	3,122,400	6,273	5,305	54.18	18.52	37.0	2,700	26.9
2	637	720	2,453	1,765	5,754	625	309	1,798,000	3,090	2,485	49.68	12.61	48.2	3,300	21.3
3	517	606	3,574	3,568	8,205	516	309	1,701,400	4,091	4,114	49.68	12.61	48.2	3,300	21.3
4	645	785	2,813	2,261	6,506	516	321	1,797,150	3,545	3,162	50.96	18.85	39.4	2,765	24.9
5	452	556	2,310	2,101	5,419	449	241	1,241,750	2,762	2,657	50.96	18.85	39.4	2,765	24.9
6	645	735	2,900	2,427	6,707	632	321	1,797,150	3,545	3,162	50.96	18.85	39.4	2,765	24.9
7	52	230	1,113	835	2,230	52	50	1,357,750	1,165	1,065	50.00	4.54	104.3	2,610	6.1
8	625	746	2,885	2,360	6,621	615	312	1,746,150	3,510	3,112	57.01	26.65	26.3	2,525	47.8
9	1,612	1,310	4,435	3,249	10,606	1,612	734	4,071,500	6,047	4,559	57.01	26.65	26.3	2,525	47.8
平均	763	848	3,304	2,691	7,607	758	325	2,055,160	4,067	3,539	53.47	18.50	36.6	2,761	27.3

雄 雌 雄 雌

地方通信

○石狩通信 (本年度鱒漁況)

本年度石狩に於ける鱒漁網は五月四日より着手し六月三十日を以て終了せるが、五月下旬より六月中旬迄が盛漁期であつた。總漁獲數六千二百三十五尾で前年度より少かつた。

○擇捉通信 (鱒漁況)

北千島流網の鱒漁獲の盛況に比較して振はなかつた擇捉も七月下旬より好轉して愁眉を開くことが出来た。八月初迄に二万石を突破したので終期迄には五万石に達する見込みなりと。

○千歳通信

△昭和九年度本場鮭採卵數は一億〇一百四十五万三千一百粒と云ふ世界記録を出したが同場の收容能力は普通の方法を以てしては六千万粒位であるのに斯く多數の收容は不思議に考へらるゝ向もある様だが之は孵化器を再三に

互りて使用し尙余る卵二千五百三十五万八千粒は養魚池底を利用する砂利床孵化を以て充當した。勿論この分の孵化成績は不良なるを免れなかつたがそれでも約七三%の孵化率を示したところを見れば他孵化場にこの方法をすゝめても差支へないと認められる。

△千歳孵化場への見學、視察を爲すものは年々多くなり最近では千歳驛支笏湖間の乗合自動車の開通によりて益々盛になつたので之等の人々の希望もあり記念スタンプを用意してある。又本會發行の孵化事業繪葉書も一組拾錢を以て頒けてをる。

△本場主催の諸會合は左の通

- 支場長會議 昭和十年五月十七、十八日
- 親魚捕獲委託事務打合せ 七月十七日
- 本場所屬事業場主任打合せ 八月六日

彙 報

○昭和九年度鮭人工孵化事業成績

場 所	親 魚 捕 獲 數	使 用 親 魚 數	採 卵 數	孵 化 數	摘 要
北海道鮭鱒孵化場	四四、六三七	二四、八九九	六九、四六六	三、七四九	七、一九〇、〇〇〇他孵化場ニ移殖
本 場	一、一三三	一、四三六	二、六六〇	九六〇	
尻 別	三、四三三	四、五七七	七、九〇〇	二、七四四	
朱 太	二、三三三	二、七三三	五、〇九七	一、二四七	
遊樂部	五、四三三	六、六三〇	二、八三三	四、二二七	
敷 生	一、七一一	二、五五五	四、三六六	九六七	
勇 拂	一、三一一	一、〇〇〇	二、一五二	五三三	
新 冠	五、〇五五	一、〇〇〇	一、二四七	二、二二七	
染 退	五、六三三	三、六三三	八、九〇〇	一、八三三	五〇萬粒本場ヨリ移殖
三 石	三、三三三	三、三三三	四、八〇〇	一、〇〇〇	
元 浦	四、九三三	三、七三三	四、八〇〇	一、八三三	
帆 別	四、六三三	七、九三三	二、〇八〇	一、〇三三	五〇三、六〇〇粒染退ヨリ移殖
天 鹽	一、四三三	一、四三三	一、〇三三	二、〇三三	
十 勝	二、三三三	二、七三三	四、九三三	二、八〇〇	外ニ染退ヨリ一、〇二〇、〇〇〇移殖
銅 路	三、八三三	二、九三三	六、八三三	三、八三三	外ニ本場ヨリ五、〇〇〇、〇〇〇當帳ヘ移殖
風 連	六、二三三	七、七三三	一、〇〇五	七、七三三	外ニ本場ヨリ一、〇〇〇、〇〇〇分與

○ 昭和九年度鱒人工孵化事業成績

場 所	親 魚		計 數	使 用 親 魚 數		採 卵 數	孵 化 數	摘 要
	♀	♂		♀	♂			
北海道鮭鱒孵化場	三三三	一一三	四四六	一九〇	五五	六三〇,〇〇〇	七四,〇〇〇	五五〇,〇〇〇分與
本 場	九一四	三三三	一二四七	五二四	一〇五	一,二六一,〇〇〇	一,二一九,一五〇	
尻 別 場	四三〇	一七四	六〇四	三〇四	一三三	七二七,五〇〇	七二七,〇〇〇	
朱 太 別 場	四三〇	一七四	六〇四	三〇四	一三三	八一九,〇〇〇	七四〇,七四〇	
天 鹽 別 場	四三〇	一七四	六〇四	三〇四	一三三	八一九,〇〇〇	七四〇,七四〇	
風 蓮 別 場	六〇〇	七三三	一,三三三	五八三	二三八	八,五七五,〇〇〇	八,二七,〇〇〇	
虹 蓮 別 場	六〇〇	七三三	一,三三三	四三〇	二五四	六九九,〇〇〇	六三三,三〇〇	

民 營	總 合		計 數	計 數	計 數	計 數	計 數	計 數
	♀	♂						
知 野 川	一,二六二	一,一七二	二,四三六	八三三	三三三	二,一〇〇,〇〇〇	二,一八九,六五五	
天 野 川	一,二六八	九三三	二,二〇一	五九八	三六六	一,七二二,五〇〇	一,六六〇,六五五	
厚 澤 部	四九九	三〇四	七〇三	三九七	一九五	九九九,〇〇〇	八七六,八七〇	
長 流	三三三	四五四	六八七	三二四	一三〇	五二一,〇〇〇	五三三,一九七	
吉 嘉 內	四三七	一,〇九八	一,五三五	四二五	一四六	九七三,〇〇〇	一,五九〇,七五〇	三〇〇,〇〇〇粒分與
尾 幌	一,一三三	一,八三三	二,九六六	九四〇	七三三	二,一〇〇,〇〇〇	一,五九〇,七五〇	
興 部	二九三	二六七	五六〇	二八一	一八四	六三五,〇〇〇	五五〇,三三〇	
溫 根 沼	五四八	三〇三	八五一	三五九	八九	四〇〇,〇〇〇	四二八,〇五九	
總 計	二二,七五三	二四,八六九	四七,六二二	一七,〇〇〇	七,九〇六	三,五一一,九三三	三,五一一,九三三	

北 國	合 擇		計 數	計 數	計 數	計 數	計 數	計 數
	♀	♂						
當 標 津	二,三二五	一,七三三	四,〇五八	一,三〇三	四七五,〇〇〇	三,四八九,三〇〇	移 殖 卵	
伊 茶 仁	九,二六一	一五,三三三	二四,五六四	四,五六四	九,八八六,〇〇〇	四,三二六,六〇〇	移 殖 卵	
目 梨	二,五五五	四,四三三	六,九八八	二,二〇五	五,六五五,〇〇〇	四,八〇九,九〇〇	四七五,〇〇〇 當別へ	
斜 里	一〇,三三九	九,五七七	一九,九一六	三,五八八	七,七五〇	四,七四九,六五〇		
網 走	三,〇七四	二,六三三	五,七〇七	一,三〇五	三,一〇五,〇〇〇	四,〇九六,九三三		
常 呂	一四,六六八	一八,五二二	三三,一九〇	七,九一五	九,九三九,〇〇〇	六,八四六,四三〇		
德 志 別	五八三	八四四	一,四二七	一三七	三〇四,一〇〇	三〇四,一〇〇		
頓 後	三,七三三	三,二六六	六,九九九	三,〇四四	七,三三〇,〇〇〇	一,六〇〇,〇〇〇	北見、天鹽、ウソタン	
二 木 城	一〇,三三三	三,五三三	一三,八六六	七,四七一	一四,三〇〇,〇〇〇	三,四八七,二六〇	川ニ移殖	
油 根 別	一,四六〇	一,五〇八	二,九六八	一,〇六四	二,〇〇〇,〇〇〇	一,九一〇,四三三		
老 門	六,六六八	七,三七〇	一三,四三八	七三三	一,四一〇,六五〇	一,三三四,四七八		
羅 白	二,六三三	六,四三七	九,〇七〇	二,七八三	二,八八七	三,〇〇五,〇〇〇		
年 那	四,六六八	六,八四八	一一,五一六	四,二七三	一,九一五	六,〇〇七,五〇〇		
紗 那	九,九三三	四,六〇〇	一四,五三三	一,七三〇	八六三	四,二七七,五〇〇		
有 那	一,一八四	一,九三三	三,一一七	八,九三三	三,九〇七	一,九二六,〇〇〇		
別 飛	四,九九九	一,五一一	六,五一〇	一,〇六六	四九六	二,二八四,〇〇〇		
當 路	二,三三三	五,六一九	八,〇五二	四,二二二	三,八〇六	四,〇〇〇,〇〇〇		
比 瓦 糸	一,九四八	三,三〇三	五,二五一	一,九六一	一,三〇八	四,〇〇〇,〇〇〇		
合 計	二〇八,三三三	二四〇,七九九	四四九,一三三	一四〇,二九〇	七五,七一一	三,四一七,六六五		

民 合		擇 國		北				
冷興捆 葉部株 白	計	比當別 其路飛 系	紗年羅 那萌白 那萌白 那萌白	音頓德 根後志 別別別	常網斜 呂走里 呂走里	目見梨 見梨	伊茶仁 伊茶仁	當幌 當幌
一、五〇五	一〇一	九、三六九	二、二九	八、三一九	七、九三五	三、三三八	一、七七一	八七七
一、四三三	九八	二九、五三五	四、五二〇	八、九六六	二、八四五	三、三三八	二、〇〇七	六六八
二、九三七	二〇〇	三、四九二	一、八五七	二、八五	四、六五四	三、三三八	三、七四八	一、五四五
五八九	一五三	四、四〇五	二、二九	四、一	二、七〇	三、三三八	一、四八七	七七七
二、六	三三	一、〇八	二、二九	八、九三	一、四五六	三、三三八	一、〇五四	三五六
一、二〇〇,〇〇〇	三六,〇〇〇	六、三三四,七〇〇	三、二六七,〇〇〇	三、三六六,〇〇〇	一、六三三,九〇〇	三、三三八	二、八五〇,〇〇〇	一、三六〇,〇〇〇
一、八二,〇四五	一〇,〇〇〇	六、三三五,八七九	三、一〇七,二〇〇	二、八三七,七〇〇	九、五〇〇	三、三三八	二、六七六,五〇〇	一、三〇九,一〇〇
		九二〇,〇〇〇粒分與	一、四七〇,八〇〇	五〇〇,〇〇〇粒移殖	二、八四三,三〇〇	三、三三八	三、五三六,八三三	一、二〇〇,〇〇〇粒分與
		與一、六五〇,〇〇〇粒分	一、四二二,三〇〇		二、〇七七,〇〇〇	三、三三八	三、〇七七,〇〇〇	二、〇〇〇,〇〇〇粒分與
		與一、七五五,〇〇〇粒分與	二、三〇四,九二二		二、八四三,三〇〇	三、三三八	三、〇七七,〇〇〇	二、〇〇〇,〇〇〇粒分與

魏	姫	紅	總 合
屈斜路湖 (イトウ)	支笏湖 阿寒湖	得茂別 鱒	計
元	一、一六七	五、六四二	二、〇四四
二七	五三二	二、八二七	九七、四三三
三	二六五	八、四六八	一、六二一
二七	七八六	五、四三三	三、六三三
三	四四三	八、九三五	二、〇四四
二七	一〇	二、三三	九七、四三三
三	二、七四九,〇〇〇	一、六二一,〇〇〇	三、六三三
	一、六七五,五〇〇	九二〇,〇〇〇粒分與	二、〇四四
	一、六七五,五〇〇	九二〇,〇〇〇粒分與	二、〇四四
	一、六七五,五〇〇	九二〇,〇〇〇粒分與	二、〇四四

〇 鮭 の 産 額

昭和九年度本道の鮭産額左の如し

支廳	河川	數	量	金	額	摘 要
後志	厚田	三〇	二	七五	四	
	濱益	二五	二	七	〇	
	豐平	一、八五〇	一七〇	一七〇	〇	
	朱太	八三四	一、七七〇	七、三二六・六	〇	
	尻別	一三	一、七七〇	一、七七〇	〇	
	野東	三三・九	六五	六五	〇	
	古宇	一二	二四	二四	〇	
	余別	一〇	四〇	四〇	〇	
	積丹					

渡島	檜山	美 國	古 平	余 市	泊 走	千 走	沙 泊	知 内	福 島	及 部	天 野	石 崎	厚 澤 部	姫 川	來 拜
二〇	一、三〇四・八	二〇	一、三〇四・八	八七二	七二	四八	八	八五	二〇	一五〇	七〇	二五	三三〇	三〇	一〇
六〇	二、九〇九・七	二、四四二	二、四四二	一一五・二	七六・八	五二	三〇	四〇	三〇	一七五	六三	一、二九五	七五	二五	二五

合計	見市	五七	一七一	一尾二付三銀三乃四
	太櫓	三二	九六	
八年度	利別	四一七	一、二一八	至四銀
	馬場	四〇	三〇〇	
七年度	種川	一七八	七一二	至四銀
	白別川	一五	三〇	
六年度	合計	六、五九三・七	一九、九六六・一	至四銀
	八年度	一、五六〇・六	五、二三一・二	
五年度	七年度	一、九二二	八、四二一・二九	至四銀
	六年度	八一四	三、〇九四	
四年度	五年度	五、八五一	四、九一九・五七	至四銀
	四年度	七、八〇四	六、二七四・九八	

○河鱒種卵の配給

山形縣水産試験場に於て同縣産河鱒種卵を配給する由なれば希望の向は本會、北海道鮭鱒孵化場又は道廳水産課へ左記事項を具し申込まれ度い。

因に河鱒は米國種であつて本邦のイワナに似た種類であつて更に美味であり東京方面に需要多い。養殖法は虹鱒やヤマメと同一である。唯本種は非常に食食であつて害魚ともなるから養殖を行ふ者は此点に注意を要する。本道では現在は支笏湖、然別湖、北海道鮭鱒孵化場(千歳)、加張漁

○全道湖沼養殖研究会の本會加入

全道湖沼養殖研究会は實質的には本會と共通点多きに依り合流して其の目的を達するを有利と認め本年網走町に於ける第三回研究会に於て満場一致決議せられたり。一方本會としては去る七月十八日の總會に於て合併に異議なく可決せられたるを以て今後は本會に於て湖沼研究会の目的に添ふべく事業を施行する事となりたり。

會 報

○第七回總會記事

本會第七回總會(鮭鱒保護協會に組織變更の初會)は去る七月十八日札幌市北海道水産會樓上に於て開催せられたり其の概況左に要録す。

(一)出席者

- 會長 (根室鮭鱒養殖水産組合) 小池 仁 郎
- 理事長 (北海道鮭鱒孵化場) 半田 芳 男
- 理事 (擇捉島水産會) 八木澤 繁 次
- 理事 (國後養殖水産組合) 向井 勇 次 郎
- 理事 (網走鮭鱒養殖水産組合) 井筒 宇 三 郎
- 理事 (紋別鮭鱒養殖水産組合) 大西 眞 平

業組合泉ヶ丘養鱒場にて養殖されてをる。

記

- (一) 配給申込卵數
- (二) 荷卸驛名
- (三) 發送通知打電先
- (四) 其の他の希望事項

備考

- (一) 卵代金壹万粒に付參拾五圓(荷造費運賃を不含)
- (二) 配給申込期限 昭和十年九月二十日
- (三) 配給時期 自十年十月中旬至十一年二月中旬

○第三回全道湖沼養殖研究会

本年度同會は去る六月二日三日の兩日網走漁業組合主催にて網走町に開會せり。來會者民間側は網走、阿寒、洞爺湖、屈斜路、厚岸、大沼、塘路、常呂、下湧別各漁業組合の外網走、紋別各養殖水産組合、網走町役場、網走驛等三十四名、官廳側は北海道廳、鮭鱒孵化場、水産試験場、宗谷、十勝、網走各支廳より十二名合計四十六名にして研究議案八件を協議せり。尙此機會を利用し網走湖、能取湖、北濱等を視察せり。

會 員

- (枝幸鮭鱒養殖水産組合) 村山 喜 作
- (鮭 鱒 漁 業) 加賀 與 三 郎
- (鮭 鱒 漁 業) 竹内 學 一
- (鮭 鱒 漁 業) 伊達 翁 記
- (天鹽鮭鱒養殖水産組合) 本田 善 助
- (石狩漁業組合) 高野 金 作
- (瀬棚郡漁業組合) 宮下 和 平
- (膽 振 水 産 會) 齋藤 主 計
- (十勝鮭鱒養殖水産組合) 水澤 一 郎
- 明石 幸 輔
- 菊地 覺 助
- 湯淺 健 治
- 山本 勝 見
- 中野 隆 輝
- 清水 利 吉
- 淺野 政 勝
- 飛島 貫 治
- 安藤 武 雄
- 齋藤 光 雄
- 野田 信 俊
- 内海 重 工 門
- 小林 信 三

計 四十二名

小川 助次郎
齋藤 憲彰
山本 信
今野 民次郎
松崎 榮次
三宅川 淺太郎
坂下 伊工門
新谷 英太郎
石川 邦太郎
山本 勇作
飯泉 功
谷口 達三
奥村 清
升田 清

△昭和九年度事業報告

昭和九年十一月二十六日第六回總會ニ於テ從來ノ鮭鯿鯿
化事業協會ヲ解散シ北海道鮭鯿保護協會ト改稱シ内容組織
ノ改善ヲ期シタリ、十年一月十二日役員會ヲ開催シテ總會
提出議案ヲ審議セリ

ナルヲ以テ更ニ考究スル必要アリト認メタリ
(ロ)老魚肝臟餌料試驗

前記老魚ノ肝臟ヲ鹽藏シ鯿稚魚ノ餌料ニ供シタリ、
其ノ結果ハ頗ル良好ニシテ養鯿業者ニ推奨スル價値
アリト認メタリ

五、調 査 事 項

(一)種卵種苗ノ配付及親魚販賣斡旋調査
種卵ノ配給希望者ハ道内外ヲ通シ多數アルモ供給力不
足ナルタメ充分ノ斡旋ヲ爲シ難ク認メタルモ本年度斡
旋シタルモノ及斡旋方申込ヲ受ケタルモノ左ノ如シ
虹 鯿 種 卵 四十五萬粒
アメマス 種 卵 二十萬粒
ヲシヨロコマ種卵 二十萬粒
キウリ 種 卵 未 定
六、其 他

本道鮭鯿定置漁業ノ維持増進ノタメ近時勃興セル沖取漁
業ノ制限ヲ緊要ト認メ農林大臣、北海道廳長官、帝國水
産會長ニ陳情セリ(陳情書ハ鮭鯿彙報第七年二十六號ニ
載セタリ)而シテ右陳情ノタメ小池會長、大西、八木澤
村山ノ各理事ノ上京ヲ煩ハシタリ

北海道鮭鯿定置漁業研究會ハ本會ニ合流セリ
一、會員 數 (昭和十年七月十五日現在)

一種會員 二十六名
二種會員 百六十九名(團體 十三名)
計 百九十五名(個人 百五十六名)

備考 九年度中ノ異動ハ脱會二名、入會十二名アリ
二、機關誌ノ發行
鮭鯿彙報第七年第二十六號ヲ昭和十年二月二十二日發行
シ會員其ノ他關係方面ニ配付セリ
三、其ノ他印刷物ノ刊行
鮭鯿鯿化事業繪端書ヲ發行シ斯業ノ宣傳ニ資シタリ

四、試 驗 事 項

(一)養 鯿 試 驗

已述ノ如ク本會ノ組織確定セザリシタメ施行スルニ至
ラズ

(二)親魚利用試驗

鮭鯿親魚及廢物ノ利用試驗トシテ左記施行セリ

(イ)老魚利用試驗

鮭老魚ノ肉ヲ凍寒貯藏シ養鯿餌料ニ供シタリ、其ノ結
果ハ餌料トシテノ營養價ハ相當アルモ製餌操作ニ不便

△昭和九年度收支決算報告

收 入

科目	豫算	決算	對 比	說 明
一、會 費	八、一〇〇.〇〇	六、〇〇.〇〇	二、三三.〇〇	一種會員四六〇圓 二種會員個人二〇七圓
二、雜收入	一、四〇〇.〇〇	三、七六	一、六〇.三三	彙報購讀料二〇五〇 利 子一四二八
三、寄附金	一〇〇.〇〇	—	—	—
四、前年度 繰 越	一、八四〇.〇〇	六、九三.三三	八、五五.六六	—
計	一、一、四〇〇.〇〇	一、一、〇〇〇.〇〇	—	—

支 出

科目	豫算	決算	對 比	說 明
一、給 與	六、五〇.〇〇	三、〇〇.〇〇	三、五〇.〇〇	事務囑託者手當及 寄稿謝禮 (但八年度分)
二、事務費	一七、〇〇〇.〇〇	一四、〇三三.〇〇	三、九六七.〇〇	印章外十三點
三、需用費	一〇〇.〇〇	四、六〇.〇〇	三、六〇.〇〇	—
四、通信 運搬費	一〇〇.〇〇	七、三三三.〇〇	七、二三三.〇〇	—
五、旅 費	一〇〇.〇〇	八、〇〇〇.〇〇	七、九〇〇.〇〇	事務囑託者分二〇圓 役員會出席者分二〇圓
六、事業費	五九、〇〇〇.〇〇	一五、一五〇.〇〇	四三、八五〇.〇〇	彙報代 三八圓 印刷費 九〇圓 陳情書代 二六圓
七、印刷費	一三〇.〇〇	四、九〇.〇〇	三、六〇.〇〇	—
計	一、一、四〇〇.〇〇	一、一、〇〇〇.〇〇	—	—

備考 會費算出基礎左ノ通

當 該 孵 化 設 備	金 額
三〇〇万粒以上	一〇圓
三〇〇万粒未満	一五〇〇〇
五〇〇〇	二〇〇〇
七〇〇〇	二五〇〇
一、〇〇〇〇	三〇〇〇
二、〇〇〇〇	三五〇〇
三、〇〇〇〇	四〇〇〇
四、〇〇〇〇	四五〇〇
五、〇〇〇〇	五〇〇〇
六、〇〇〇〇	五五〇〇
七、〇〇〇〇	六〇〇〇

△昭和十年度事業計畫並豫算
左記の通決定せり

事業計畫

- 一、機關雜誌及其他印刷物ノ刊行
- (一) 鮭鱒彙報ヲ年四回以上發行ス
- (二) 其ノ他本會ノ目的ヲ達スルタメ必要ト認ムル圖書ヲ豫算ノ範圍内ニ於テ隨時刊行ス
- 二、會 議
- (一) 總 會 一回開催ノ豫定

科 目 金 額	摘 要
一、五〇〇圓	養鱒賣却代五萬尾一尾三錢 一、五〇〇圓
三〇〇圓	利子、設計料、手数料、雜誌及印刷物賣却代
二八〇圓一六錢	前年度繰越
一三九圓八四錢	寄附金
四〇〇圓	過年度收入
三、九九〇圓	計

科 目 金 額	摘 要
一五〇圓	事務囑託者手當
三八〇圓	三、事務費
三〇圓	需用費
五〇圓	運搬費
三〇〇圓	旅費 役員會出席者旅費補助三十名分
二、七一〇圓	三、事業費
五〇〇圓	印刷費
四五〇圓	會議費

一回開催ノ豫定

- (一) 役員會
- (二) 試驗事項
- (一) 養鱒試驗
 - 鮭鱒類ノ池沼河川ヲ利用スル養魚ヲ行ヒ斯業ノ發展ニ必要ナル事項ニ付試驗シ併セテ生産魚ヲ試賣ス
- (二) 親魚利用試驗
 - 孵化用親魚並老魚ノ利用方法ニ付試驗セントス
- 四、調査事項
 - (一) 鮭鱒種族ノ系統調査
 - (二) 鮭鱒漁業及養殖ノ障害防止ニ關スル調査
- 五、幹旋事項
 - (一) 種卵、種苗ノ配給幹旋
 - (二) 親魚ノ販賣幹旋
- 六、其ノ他

科 目 金 額	摘 要
一、六七〇圓	一、會 費
一、〇〇〇圓	二、種會員百名
五七〇圓	種會員受託者
五〇〇圓	漁業者八百五十名
五〇〇圓	養殖業者三十名
一〇〇圓	種卵代
一〇〇圓	何料代
一〇〇圓	工賃
一〇〇圓	雑費
五〇〇圓	養鱒費
一〇〇圓	試驗費
一〇〇圓	親魚利用試驗費
一〇〇圓	調查費
一〇〇圓	幹旋費
一〇〇圓	雜費
三、九九〇圓	計

科 目 金 額	摘 要
三三〇圓	養鱒試驗費
一〇〇圓	親魚利用試驗費
一〇〇圓	調查費
一〇〇圓	幹旋費
一〇〇圓	雜費
二〇〇圓	交際費
三三〇圓	負債償還費
二二〇圓	豫備費
三、九九〇圓	計

△顧問設置に關する件

總會の決議により本會顧問として左記六氏を推薦するゝ
となれり。

- 北海道廳水産課長
- 北海道水産試験場長

函館高等水産學校長
小樽水産學校長
農林技師 徳久三種氏
理學博士 藤田經信氏

△道外人會者に關する件

本道外に在住する者にして本會に入會を希望する向は入會を差支なき事に決議せり。

○會 員 消 息

○新入會員

昭和十年二月以降本會に入會せる會員左記の通

會 田 庄 藏	北海道鮭鱒孵化場
中 村 永 一	全
岡 田 萬 一	全
坂 本 勝 一	全
秋 葉 萬 次 郎	全
星 野 克 巳	全
櫻 井 基 博	全
升 田 清	全
飯 田 毅	全
三 浦 兼 祐	全
柴 田 幸 一 郎	全
	虹別支場 國後支場

松 原 喜代松 水産講習所
鶴 田 廣 北海道鮭鱒孵化場國後支場附
屬音根別事業場

○脱 退 會 員

波多野 安吉 前田 篤

○死 亡 會 員

宮崎榮次郎君

本年七月十九日不慮の災禍にて逝去せらる。同君は勇拂孵化場親魚捕獲を擔任せられ本會最初よりの會員なり哀悼に堪えず、

○會 費 領 收 報 告

本會二種會員の本年三月一日より八月六日迄の會費領收報告左の通

△十 年 度 分

淺沼美義 橋山光治 岡田 萬 鶴田 廣 三宅川淺太郎
濱畑正男 淺黄谷成城 渡邊定吉 野口正樹 高木 爲吉

△九 年 度 分

内海 登 濱畑正男 池田利三郎 小野政秋 押味幸一
野口正樹 佐藤三太郎 土屋幸吉 小池寶三郎 久保田定二 淺沼美義 石田竹彦 吉野武者二 鴨志田彦七

板谷 茂 小田部景一 道上永吉 三宅川淺太郎 佐野誠三 岸田敏明 谷口達三 淺野政勝 水澤一郎 大西眞平 飛鳥貫治 高木爲吉 會我部齋治 品川金次郎

△八 年 度 分

内海 登 濱畑正男 小野政秋 押味幸一 野口正樹 佐藤三太郎 土屋幸吉 小池寶三郎 久保田定二 淺沼美義 小田部景一 道上永吉 波多野安吉 高木爲吉 會我部齋治 品川金次郎 佐野誠三 可香谷政夫 淺野政勝 水澤一郎 大西眞平 飛鳥貫治

△七 年 度 分

小野政秋 土屋幸吉 小池寶三郎 久保田定二 淺沼美義 道上永吉 内海 登 品川金次郎 淺野政勝

△六 年 度 分

小野政秋 小池寶三郎 久保田定二 道上永吉 内海登 品川金次郎 淺野政勝

△五 年 度 分

小池寶三郎 久保田定二 淺野政勝

△四 年 度 分

小池寶三郎 久保田定二

○寄 贈 圖 書

日本水政新聞、水産新報、東京水産新聞、釣人、水産公論

會 告

- ◆ 別記の通り昨年十一月を以て本會創立せられ孵化事業協會員は其儘本會員となられたる次第なるも若し御都合に依て入會にならざる方は其旨至急御一報を乞ふ。
- ◆ 本會々費は第二種會員は年額金壹圓とし十年度分は來る四月に御拂込を乞ふ。
- ◆ 孵化事業協會時代の未納會費は別に納入申上ますから至急御拂込下さい。
- ◆ 本會十年總會は來る五月中旬開催の豫定

○寄稿 歡迎

- 一、論説、資料、趣味、地方状況の各欄及寫眞、圖表等に關し寄稿を歡迎す。
- 一、本誌に掲載せるものには薄謝を呈す。
- 一、論説、資料の各欄に掲載せる分の別刷は御希望に依り三十部を限り無代進呈す。
- 一、原稿用紙は申込次第郵送す。

昭和十年八月卅一日印刷
昭和十年九月五日發行

札幌市北二條西七丁目一番地
編輯兼 半 田 芳 男
發行人

札幌市外苗穂五十番地
印刷人 田 中 幸 司

膽振國千歲村北海道鮭鱒孵化場内
發行所 北海道鮭鱒保護協會

弊所特製『漆塗孵化盆』 其他孵化盆
孵化槽、孵化枠、受卵器、各種染料
漆、アスファルト(流動)、テレピン油、塗料類
亀甲紗(卵掬用)、採卵海綿、標本瓶
卵子消毒薬各種、化学薬品、醫療薬品
孵化場用印刷物一切、父子堂製劑
虹鱒、鮎、鯉等ノ孵化用器具一式

鮭鱒孵化器製造元 山本勝見工作所

札幌市北三條東六丁目電停前
電話 フイフナ 二五二七番
振替小樽 三九七八番